

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

「こころ」が動く
「からだ」が動く

学校法人みのる学園 新大船幼稚園

目次

第1章 研究主題と目的	1
1. 1. 本園の「科学する心」についての捉え方	1
1. 2. 研究主題：「こころ」が動くと「からだ」が動く	1
第2章 実践事例と考察：「こころ」が動くと「からだ」が動く～ザリガニ釣りの実践を通して～	2
2. 1. 思わぬ出来事がもたらした「こころ」と「からだ」の動き	2
【事例 1-1】「“エビ”がきた」	2
【事例 1-2】「ザリガニはミミズを食べるらしい」	2
【事例 1-3】「〇〇“ちゃった”」	2
[考察]	3
2. 2. コツを掴む	3
【事例 2-1】「ぐらぐらしたらもちあげる」	3
【事例 2-2】「しずかに」	3
【事例 2-3】「“投げる”がつながる ～S くんのカスティング～」	3
[考察]	4
2. 3. 伝え合う・伝播する	4
【事例 3-1】「現地調達」	4
【事例 3-2】「事件発生」	5
【事例 3-3】「あたりめとは何か」	5
【事例 3-4】「あたりめのおはなし」	5
[考察]	6
2. 4. 相手（ザリガニ）をわかろうとする子ども	6
【事例 4-1】「おおきくして観る」	6
【事例 4-2】「ザリガニをあらわす」	7
【事例 4-3】「条件付特定外来生物としてのザリガニ」	7
[考察]	7
2. 5. H くんのエサ研究	8
【事例 5-1】「しらすを食べるかも」	8
【事例 5-2】「するめとカプセル」	8
【事例 5-3】「進化する釣竿」	8
【事例 5-4】「浮かぶとか沈むとか」	9
【事例 5-5】「カテゴライズ」	9
【事例 5-6】「最強を使って」	9
【事例 5-7】「ザリガニトラップ」	10
[考察]	10
2. 6. 「これでいい」と思うこと	11
【事例 6-1】「あたりめをつくる」	11
【事例 6-2】「イカを買う」	11
【事例 6-3】「イカガオドル」	12
【事例 6-4】「たしかな手応え」	13
[考察]	13
第3章 総合考察・今後の課題と方向性	14
3. 1. 総合考察	14
3. 2. 今後の課題と方向性	15

第1章 研究主題と目的

1. 1. 本園の「科学する心」についての捉え方

日々の生活の中で出合う様々な事象に人は感動や驚きを覚え、自らの感性を豊かにしていく。そして、自らの「こころ」と「からだ」が反応し、「なぜだろう」「どうしてだろう」「わかりたい」という感覚に出合った時、人は懸命に自分なりに解釈し、「試す」のではないだろうか。これこそが「科学する心」であると考えられる。

そして、それは人が生まれながらに持ち合わせていると考える。だからといって、放っておけば、生まれてくるものでもなければ、仮に生まれていたとしても、その心を価値づけることがなければ、深まることも、広がることもないのではないだろうか。その一方で、保育者をはじめとしたおとなが望ましいと考える感性や創造性を一方的に示し、そこに向けて「育てる」ものではないと考える。また、何に、「こころ」を動かされるか、いつ動かされるかは、同じ事象とかわり、同じ活動のなかに身を置いていたとしても、人それぞれ違う。よって、「科学する心」は一律に「育てる」というより、その当人を取り巻く人やモノとの関係のなかで「発揮する（あるいは、される）」ものとして捉えたい。個々の子どもの「科学する心」が、結果として「育てている」ことには違いないが、本論文では、周囲の人やモノとの関係のなかで「発揮する（あるいは、されていく）」ものとして捉え、考察していく。

1. 2. 研究主題：「こころ」が動くと「からだ」が動く

では、保育の中で「科学する心」は如何様に「発揮される」のか。当園では数年前より“子ども主体の保育”への転換を図ってきた。その中でも特に「対話」と「環境」をキーワードに職員と試行錯誤を重ねてきた。

まず初めに職員間の「対話」を見直した。園内研修では、これまでは主に業務連絡が多く、子どもの姿を語り合う時間がほとんどなく、各クラスの子どもの様子がブラックボックス化している状況だった。そのため、園内研修を見直し、写真カンファレンスを中心に子どもの姿を語り合う時間を設けるようにした。写真を使った振り返りでは、その時々の子どもの思いを省察したり、他の職員と語り合うなかで各クラスの保育が開かれたりしていく変化が生まれた。そういったなかで、園内研修だけでなく、日常的に職員同士で子どもの話・保育の話「対話」する姿が見られるようになり、結果として、個々の保育者の日々の子どもの「対話」や「環境づくり」にも変化が見られるようになっていった。

具体的には、子どもの「声」（発せられるいわゆる声だけでなく、思いを含む）に着目し、「いま」の興味関心に合わせ環境をその都度再構成し、多様な素材や道具が手に取れる環境づくりを心掛けるようになり、そのような環境のなかで子どもが自らの興味関心に基づき、それぞれのペースで、それぞれが探究し、お互いに影響を与え合いながら、「よりよいものを生み出そうとする姿」が見えるようになってきた。つまり、子どもや環境構成が変わっただけでなく、子どもとともに保育を創っている私たちの保育者の子どもに向けるまなざしや子どもの探究に向かう姿勢が変化していくなかで、子どものさまざまな探究が、これまで以上に見られるようになってきたのである。

その一方で、環境づくりの一環として図鑑や本を活用するなかで難しさを感じることもあった。生き物について、作り方についてなど様々な場面で子どもが気軽に文字や写真、絵を参考に調べることができる一方で、保育者側にそうした意図がなくても、「答え」を一方的に提示することにはなっていなかったかと戸惑うと同時に、その子なりのわかっていく過程を奪ってはいないかと自問自答することもあった。

そこで、そうした図鑑や本を活用するにせよ、しないにせよ、子どもが物事を探究していく過程において、どのような「こころ」と「からだ」の動きがあるのかに注目したいと考えるに至った。そのように、子どもの「こころ」と「からだ」の動きに注目することで、子どもが日々の遊びのなかで試行錯誤している内実に迫ることが可能となり、自分なりに解釈し、試し、必要な「技術」や「知識」を獲得していく過程、すなわち「科学する心」を発揮していく姿を、子どもの側から捉え直したいと考え、本研究の主題とした。視覚（みる）聴覚（きく）触覚（さわる・ふれる）嗅覚（におう）味覚（あじわう）といった五感や身体感覚・平衡感覚・深部感覚・固有感覚・運動感覚・皮膚感覚といった自らの「からだ」を使ってどのようにその子なりの探究を深めているのか、子ども自らの「こころ」と「からだ」の動きから科学すること意味を考えてみたい。

そして、もう一点。「科学的な営み」を支える要素に「うまくいかないこと」があると考えられる。人は、「うまくいかない時」にこそ「なんとかできるようになりたい」と繰り返し、試行錯誤・葛藤をするのだろう。

しかし、その一方で、「うまくいかないこと」が続く時、「どうせうまくいかない」「もういいや」といったネガティブな感情を生み出し、消極的に見える姿を生み出すことにも繋がると考える。

これまで当園ではそういった感情にならないようにと保育者が先回りし「うまくいくこと」を目的としてしまい、つい「うまくいかない」機会を奪ってしまうことがあった。

そこで、今年度は「うまくいなくてもいい」「挑戦してみたい」を大事に、「うまくいかないことを楽しむ・とことん探究する」を職員間で共有し、キーワードとして今年度の保育にあたった。

こうしたことから、本研究の目的は、子どもの探究における「こころ」と「からだ」の動きに視点を置きながら、その動きが、他児や保育者など多様な人の「こころ」と「からだ」の動きとの関係のなかで、立ち現れていることを明らかにし、「科学する心」が、そうした多様な人や事象との関係のなかで「発揮されていていく」ことを考察することにある。

[掲載事例の選定理由]

本研究の実践事例は、ザリガニと様々なかかわりを持ち、情熱を捧げていた子どもの姿を取り上げる。

身近な生き物とかかわる中で生まれた偶発的な出来事からブームとなり、“大いにうまくいかないこと”を経験しながら「こころ」と「からだ」を動かし探究する子どもの姿に「子どもの飽くなき探究心」を感じたからである。その中でも特に〈「からだ」を通して科学している姿〉と〈「うまくいかないからこそなんとかしたい」といった試行錯誤・葛藤する姿〉が見られた事例を中心に選定した。

第2章 実践事例と考察：「こころ」が動く「からだ」が動く～ザリガニ釣りの実践を通して～ (2025年4月～6月)

2. 1. 思わぬ出来事がもたらした「こころ」と「からだ」の動き

本節では、身近な生き物とのかかわりや思わぬ出来事との出会いの中で、自らの「こころ」と「からだ」が思わず動いていた子どもの姿を中心に取り上げる。

【事例1-1】「“エビ”がきた」(2025年4月)

春が訪れ、少しずつ暖かい気候が続く、園庭にも様々な生き物たちが顔を出し始めた。アリやダンゴムシ、チョウなどを観察したり、飼育をしたりと身近な生き物と関わる姿が見られた。

そんな中、保育者が知人から「エビ」を譲り受け、育てることとなった。

少しすると、体からハサミのようなものがでてきた。よくよくみたらエビではなくザリガニであった。

昨年稲の栽培を行ったトロ舟のちいさな田んぼがあり、そこで飼育することにした。

「ザリガニどこかな？」と毎日ちいさな田んぼを覗いて観察を楽しむ子どもたち。

このザリガニとの出会いをきっかけに子どもの探究がはじまった。



【事例1-2】「ザリガニはミミズを食べるらしい」(4歳児・5歳児 2025年4月23日)

園庭の一角に「土置き場」がある。ここもまた子どもたちの虫探しスポットの一つである。土を掘り、虫を探していると幼虫やミミズとの出会いがあった。

ある時、「ザリガニはミミズを食べるらしい」そんな噂が流れ始めた。

「ほんとかな？」と疑問に感じたRさんとYさんは少しドキドキした様子でザリガニの近くにミミズをぽんと落としてみると、“パクッ”とザリガニがミミズを挟んだ。

RさんもYさんも驚きと感動で開いた口が塞がらない様子で少し間が空いた後、「たべた！」と声にし、興奮気味に園庭を駆け回り、友だちや保育者に報告をしていた。



【事例1-3】「〇〇“ちゃった”」(4歳児・5歳児 2025年4月24日)

ザリガニがミミズを食べた(挟んだ)ことをきっかけに「もしかしたらミミズでザリガニを釣れるかもしれない」という期待感が生まれ、挑戦してみることにした。糸にミミズを括り、ザリガニ釣りに挑戦する子どもたち。

そっと水のなかに垂らしじっと待つ。しばらくして糸をゆっくり持ち上げてみると、なんとそこにはしっかりとザリガニの姿が見られ、釣りあげることになった。

「釣った」というよりは「釣れちゃった」に近かったが、この出来事をきっかけにザリガニ釣りへの興味が深まっていった子どもたちであった。

また、ミミズが苦手なYさんもザリガニ釣りに挑戦していたのだが「触れないんだよなー」と言って何回か友だちにとってもらっていた。だが、今日は「今は釣るのに忙しい」と断られ、



渋々スコップを手に取り「土置き場」を掘り始めた。掘っても掘ってもミミズはでてこない。時間が経ち「いない」と少し不機嫌になったＹくんだったが、そんな時にミミズがひょいと土から顔をだした。すると、スコップを投げ捨てサッとミミズを掴んだ。本人が驚いた様子で「ミミズ触れるようになった！」と言った。

【考察】

本節では、本事例のきっかけとなった「エビ（ザリガニ）」との出会いにおける子どもの「ころ」と「からだ」の動きについて考察する。

まず、はじめに虫探しについてである。子どもたちの姿を見ていると、「どのような場所でどのように捕まえたか」を記憶し、その後の虫探しに活かしているように見受けられる。つまり自らの「手」を通して得た情報を元に、「ダンゴムシを見つけるならここ」「アリの巣の穴はここにある」「幼虫やミミズは土置き場にいる」と、子どもたちが園環境を虫取りの場としてスポット化している。当園の「土置き場」が虫探しスポットのひとつであると記したが、先述したようにこれまでの経験を基に足を運ぶ子もいれば、すでにその情報を持っている“先輩”からの情報を聞いてスポットを訪ねている子もいる。そして、保育者が教えることがなくとも子どもたちの中では「ああ、あそこね」と独自のやり方で「スポット」を共有している。つまり、「ここにいる（視覚）」「捕まえた（触覚）」といった「からだ」を通して得た情報は伝承し、一つの園文化の創造にも繋がっているのである。

また、「ザリガニはミミズを食べるらしい」という“噂”には、「どうなるのだろう」という「ころ」の動きが見られ、試したくなり「からだ」が動く子どもの姿が見られた。ザリガニが“バクッ”とした姿には驚きと感動があったように思う。“園庭を駆け回る”という動きは「からだ」から溢れる「喜びのサイン」であったと考える。そして、【事例 1-3】では「釣れちゃった」「触れちゃった」という出来事の記述をしたが、子どもたちの姿をみていると、「こうなりたい・こうありたい」という思いをもとに出来事に向かう姿があると同時に、こうした偶発的な出来事から得る学びが多くあるように感じる。ミミズに触れるようになったＹくんは、触りたいと思って触ったわけではなかったし、ミミズに触れることが“いいこと”ということでもない。ただ、夢中になっているうちに、自分でも意識していなかった「できること」がＹくんの喜びにつながっていた。お迎えに来た保護者に嬉しそうに「触れるようになったんだ」と報告する姿に自信をつけている様子が伺えた。

思わぬ出来事や偶発的な出来事から、人は「おもしろさ」を感じるのではないかと考える。

2. 2. コツを掴む

前節の思わぬ出来事をきっかけにザリガニ釣りがブームとなった。本節では、そのなかで、「どうすれば釣ることができるのだろうか」と色々とし、自らの「からだ」を通してコツを掴んでいく、また「からだ」の使い方を応用する子どもの姿を取り上げる。

【事例 2-1】「ぐらぐらしたらもちあげる」（4 歳児・5 歳児 2025 年 4 月 25 日）

いとも簡単に釣り上げる子もいれば、なかなか釣ることができない子がいた。なかなか釣れないＴくんは「もう、できない」と痺れを切らす様子であった。

そんなＴくんを横目に何度もザリガニを釣り上げるＹくん。しまいには２匹同時に釣り上げた。

Ｔ「全然釣れない」

Ｙ「あのお、“ぐらぐら”したら持ち上げてごらん。そしたら釣れる」

Ｔ「わかった、“ぐらぐら”ね」

アタリの合図は「ぐらぐら」のようだ。

「ぐらぐら」を手掛かりにＴくんは再度ザリガニを釣り始めた。



【事例 2-2】「しずかに」（4 歳児 2025 年 4 月 25 日）

Ｂくんももう何度もザリガニ釣りに挑戦しているが、未だアタリはなし。Ｂくんは日頃より、大きな声を出して、周りの子を驚かせてしまう姿が見られていたのだが、釣り中もザリガニが近づくと、興奮して「きたきた！」と大きな声を出していた。すると、サッとザリガニが逃げてしまうことがあった。

何度か逃げられると、「しずかなほうがいいかもしれない」といって、会話もヒソヒソ声になった。大きめの声を出す子がいると「しー、しずかに」といいながら、誰よりも静かにじっと待つＢくんであった。

【事例 2-3】「投げる」がつながる ～Ｓくんのキャスティング～（5 歳児 2025 年 6 月 16 日）

園外保育などで池のあるところでザリガニ釣りを楽しむ姿が見られた。

Ｓくんのキャスティングに目を引かれた。竿先から綺麗な放物線を描き、着水する。しかも、投げる前に後方を確認するという「釣り人のマナー」もあり、まさに経験者のような佇まいであった。

S くん「釣りに行ったことがあるの?」と尋ねてみると「ないよ」といった。「そうなんだ! 上手に投げているからやったところがあるのかと思った」と伝えると、「だってさ、ベ이스ターズの人に投げ方教えてもらったから」と話した。



今年度の5月、DeNA ベ이스ターズの「園ふれあい訪問」があり、その時にボールとバットを用いて投げ方・打ち方を教えてくれたのである。投げるポイントとして、「胸を開き、手を大きく振りかぶる」ということを教わったことを覚えていたようで、それを実践していたようだ。

再度、S くんのカスティングを見てみると、まさしくその投げる動作のコツを活かしていることが伝わってきた。

[考察]

本節では、子どもがどのように「からだ」の感覚を使い、自分なりのコツを獲得していったのか、あるいは活用できるようになっていったのかについて考察する。

コツを掴むということは「感覚を手に入れる」とも言えると考え。「ぐらぐらしたら持ち上げる」というこの「ぐらぐら」は、Y くんが釣り上げた時に味わった「この感じ」が釣るために必要だと「指先の感覚」を言語化していたのである。

一方で【事例2-2】では、子どもが発する「声色」に着目した。「大きな声を出すと逃げてしまう」は【事例2-1】とは異なり自分の感覚ではなく、自分の発した声による「変化」に気づきを得て、自分のものにしていく姿が見られた。前述したようにB くんは日頃、衝動的に「大きい声」を発することが見られ、課題の一つであったが、好奇心が衝動に勝る瞬間でもあったように感じる。自分の「からだ」の使い方を考えるきっかけとなった出来事とも言えるであろう。

【事例2-3】では「投げるコツ」が間接的に影響を与えていたことが伺える。野球の投げ方と釣りの投げ方は一見異なるように感じるが、S くん言葉にあるように「からだの使い方」の応用をしていたのだ。

これらの姿から「からだ」の感覚を一度自分の中で理解し、言葉にすることや自分の中に留めていくこと、また自分が「起こしたこと」の変化を感じ取ることで、「感覚を手に入れる（自分のものにしていく）」のではないかと考えた。

自らの「からだ」でわかってきたことを記憶し、それをもとに新たな「試し」に繋げていた。

2. 3. 伝え合う・伝播する

前節では、自らの「からだ」を通して感覚を手に入れ、コツを獲得していく姿を取り上げたが、本節ではその自分が感じたこと、考えたことを伝え合う姿を中心に取る。

【事例3-1】「現地調達」(5歳児 2025年4月30日)

園庭でのザリガニ釣りが盛り上がりを見せていたため、以前ザリガニ釣りをしたことがある公園へ園外保育に出かけた。以前はザリガニ釣りをする時には保育者が割り箸・たこ糸・さきイカ等を用意して、ザリガニ釣りをした。しかし、今年度はその公園にはザリガニがいるという情報は子どもたちには伝えていたが、これまで楽しんできた経緯があったので、保育者はたこ糸だけを持っていき、それ以外は持たずに園外へ向かうことにした。

園外保育当日、公園でザリガニがいる池をみて（実際には見えていないが）目を輝かせる子どもたち。早速、「釣りたい」と話した。園庭ではたこ糸だけで釣っていたが、池ではそうはいかない。なぜなら「遠くにいそう」だからだ。

J「奥にいるな…」

Y「紐だと届かないから釣竿をつくらなきゃいけないね」

S「そしたらさ、棒が必要だね」

Y「集めよう！」

公園中を探しまわり拾っては捨て、好みの長さ・重さ・形など各々が“お気に入りの一本”を見つけた。落ちていた竹や木の枝、蔓のようなものまで様々な一本を持って池に戻ってきた。

紐を括り「さあ、釣るぞ」となったものの、何かが足りないことに気づいた。



「あ、エサがない」「何で釣れるかな」「ミミズでしょ」「たしかに」といって池の周りの泥を掘り起こしているとヤゴやタニシがいた。

また、落ちていたタケノコをもってきた子もいた。公園内を探すもお目当てのミミズは見つからなかった。それらを使ってみるもまったく反応はなかった。

すると、J君が何か思い出したように話しはじめた。
J「あのさ、ぼくは前にパパとザリガニ釣りをした時に“あたりめ”を使ったよ」
T「あたりめってなに？」
J「あたりめってね、四角くて細長くて、ハムみたいなやつ」
T「へえ、みんなにも教えてあげようよ」
J「わかった」



この日はザリガニを釣ることはできず、残念そうな表情も浮かべたが、「あたりめ」に期待を膨らませて「また来たい」と公園をあとにする子どもたちであった。

また後日、次の園外保育に向け、5歳児担任保育者は公園にひとりで「下見」に行った。これは単に園外保育の下見ではなかった。なぜなら、ここは何度も足を運んだことがある公園であったからだ。しかし、保育者自身はザリガニ釣りの経験がなかったため、そこにザリガニはいるのか、釣れるのか、子どもは何をそんなに面白がっているのかということ「試して」みたかったのだ。試しにエサと竿を握りしめて公園に向かい、池に立つと「いるかわからないからこそ、釣れるかな？釣れないかな？とわくわくした」と話していた。

【事例 3-2】「事件発生」(5歳児 2025年4月30日)

公園から帰ると、異臭を放つバケツを見つけた。バケツの中をみってみると何匹かザリガニが死んでいた。

どうやら前日に釣ったザリガニを放置してしまっていたようだ。クラスの集まりで、このバケツを囲みながら話をすることにした。

主に「どうして死んでしまったのか？」「死んでしまったザリガニをどうするか？」この2つの話題が上がった。とその前に「くさい」とHちゃん。周りの子も同調した。



死んだザリガニを見る前に、その「におい」から死を感じ取る姿が見られた。なぜ死んでしまったのかということには「暑くなってきたから」「水が汚かった」「エサがなかった」「狭かったから」と、色々と考えを巡らせた。

そして、死んだザリガニについては、「埋めたらいいと思う」「お墓をつくってあげる」などの弔い方法を考える子が多くいた。そんな中Aくんが「あのさ、動かなくなっちゃったでしょ。死んじゃったんだけどさ、動かないからさ、あのでっかくみえるやつ(マイクロスコープ)でザリガニを観てみたい。それが、いのちを無駄にしないってことだと思う」と話した。

【事例 3-3】「あたりめとは何か」(5歳児 2025年4月30日)

その後、公園で話題になった「あたりめ」の話になった。
T「あのさ、公園でくくんがさ、あたりめってというのがエサって言ってた」
Y「あたりめって？」
J「あのね、四角くて細長くて、ハムみたいなやつだよ」
R「あ、ぼくはするめでやった」
H「するめってイカ？」
A「あたりめもイカじゃない？」
H「しらべてみよう！」
“あたりめ”についてもっと知りたくなった子どもたちであった。



【事例 3-4】「あたりめのおはなし」(5歳児 2025年5月1日)



話し合いの翌日「あたりめ」と「あたりめの成分表」を保育室に用意してみると、最近字を書くことをおもしろがるHちゃんが「“あたりめのおはなし”をかきたい」と言い、紙とペンを取り、早速書きはじめた。

近くにいたMちゃんは成分表を持ち、Hちゃんが見て書き易いようにサポートしていた。

「あたりめのおはなし」ということは物語なのかと思っているとそうではなく、あたりめについてわかったことを記録していた。

よくみて、嗅いで、調べて、一生懸命に「あたりめのおはなし」を書いていた。



【考察】

本節では、自分が「感じたこと」を伝え合うことで、どのような営みや広がりが生まれていくのか、また、他児や周囲のおとなへどう伝播していくのかについて考察する。

園外保育の竿探しでは「これがいいだろう」と見立て、自らの手で「ほどよい」と思うものを見つける姿があった。そして、問題の解決の糸口を一人ひとりの考えを伝え合い、解決に向かおうとする姿やどのようなものが「ベスト」なのか探る姿があった。

「くんが自らの経験をもとに伝えた「あたりめ」の情報もまさに目から鱗の情報であり、伝播している様子が伺えた。さらに、新たに知った「あたりめ」というキーワードと保育者の用意した環境構成（あたりめの成分表）を手掛かりとして、Hちゃんのように新たな探究を生み出す子どもたちがいた。

「ザリガニの死」と「あたりめについて」どちらも子どもがよく使っていた感覚は「嗅覚」であった。

「におい」から情報を得ているのだ。とはいえ、「におい」は特にそれぞれの感じ方が違う。当たり前のことであるが、同じ「におい」を嗅いでも「いいにおい」と思う人もいれば「くさい」と感じる人もいる。だからこそ、そういった「感覚」を伝え合うということは自分の感覚にはなかったことや自分の「知」にはなかったことも「引き出し」のひとつとなっていく様子が伺えた。

そして、こうした子どもの姿の背後には、保育者の「こころ」と「からだ」の動きがあった。

子どもたちが懸命に探究をしていたからこそ、「園外でやってみよう」という計画を立てたり、ザリガニ釣りの「準備」を保育者が整えるのではなく、子どもとともに「からだ」を使って考えられるような余白をつくったりしていた。

また、5歳児担任保育者の「下見」は公園での過ごし方を考える下見の意味ではなく、子どもの「視点」に合わせ、自らの「からだ」を使って、子どもがおもしろがっていることを同じように「試し」たり、想像したくなり保育者自身もそのおもしろさに出合っていたのだ。そして、その保育者の姿をみた隣のクラスの保育者は「楽しそうだった」「子どもと同じようにおもしろがっていた」と話していた。つまり、子どもたちの「こころ」と「からだ」が動く時に、保育者自身の「こころ」と「からだ」もこうして動いていた。

そして、その姿は「自分がおもしろがっていることをおもしろがっているくれる存在」ともいえる。そのような存在が「安心感」につながり、子どもたち自身のチャレンジを支える重要な要素であると考えられる。

2. 4. 相手（ザリガニ）をわかろうとする子ども

本節ではこれまで夢中になってきたザリガニが身近な存在になっていき、そういったなかで「もっとわかりたい」「もっと近づきたい」と多様なかわり方で探究を深めていく子どもの姿を取り上げる。

【事例 4-1】「おおきくして観る」（5歳児 2025年5月1日）

ザリガニが死んでしまった際に「でっかくみえるやつ（マイクロスコップ）でザリガニを観てみたい」と話していたAくん。話し合いの次の日に観ることにした。

マイクロスコップで死んでしまったザリガニを観てみると、「足はこうなっているんだね」「ちいさなハサミがついてるね」などとザリガニの体の仕組みに気づいた。

じっくりと観ていくうちに、線のようなものが写った。

「これはなんだろう」と不思議がる子どもたち。

すると、Aくんが「これ、キズだ」と言い、死んでしまった理由のひとつに「大きなキズをおってしまったのではないか」という仮説を立てていた。周りの子たちも「そうか、ケガをしちゃったのか」と話した。

そういったなかで、YTくんがボソッと「あたりめとおなじにおいがする」と言った。他児もその言葉を聞き「たしかに！あたりめとザリガニはおなじにおいだね」と話していた。



○「おおきくみて」わかったこと

- ・体の仕組み
- ・大きなキズができていた
- ・あたりめと同じにおいがする

といった発見があった。キズと言っていたのは、実際には「ザリガニの足」であった。

まるで「検死」のように、なぜ死んでしまったのかを子どもたちなりに一生懸命に考えていた。そして、この日は「くさい」ではなく「あたりめと同じにおい」と話していたのも印象的であった。

【事例 4-2】「ザリガニをあらわす」(5 歳児 2025 年 5 月)

ザリガニ釣りをきっかけにザリガニそのものへの「好き」が深まっている様子が伺えるようになってきた。というのも、遊びの中で釣るための道具づくりだけでなく、描く・模るといった様々な表現が見られるようになったからである。技法も様々であり、そこにその子の思いが含まれているように感じる。

① 入園当初から虫や生き物への関心が高かった YT くん。
ザリガニも触ってみたり、観察してみたりとじっくりとかかわる中で特に体の仕組みや構造に興味を持っていた。
そんな YT くんは牛乳パックを切り、貼り合わせてザリガニを模っていた。



②遊びの中で「もっと本物みたいにしたいんだ」とよく話す A くんはザリガニの写真にトレーシングペーパーを重ねて、うつし絵を描いていた。
写真選びでもこの角度が A くんにとってザリガニのかっこいいポーズであると話していた。



③写真や記憶だけでなく実際にザリガニをじっくり観察して模写する姿も見られた。
動くからこそその難しさもあるが、写真ではあらわせない艶・色味・肌感があり、本物ならではの。



④クレヨンで模写したのち、色をつけたいとはじき絵にすることにした。すると、はじめは赤の絵の具を用意していたのだが、「この色じゃない」と話す A くん。たしかに目の前のザリガニは「絵の具の赤色」ではなかった。赤・青・黒の絵の具を使って色を調合しながら目の前にいる「このザリガニ色」をつくり、はじき絵を完成させた。



A くんのはじき絵をきっかけに「やってみたい」が広がっていった。

そして、正面から見たザリガニ・ザリガニの家族を想像して描いたもの・ザリガニを覗いている自分を描いたもの・手足の本数を忠実に再現するものなど様々な表現が見られ、どれもその子とザリガニのかかわりが浮かぶような作品がうまれた。

【事例 4-3】「条件付特定外来生物としてのザリガニ」(5 歳児 2025 年 5 月 30 日)

ザリガニとかかわりを楽しんできた子どもたち。身近になってきたからこそ、子どもたちに「条件付特定外来生物」についての話をした。

環境省の HP を参照し、捕まえることや飼育することは可能であるけれど、
・一度飼ったら放さない
・死ぬまで飼う覚悟がないなら最初から飼わない
といった一定のルールがあることを伝えた。最後の手段として「殺処分」が挙げられていた。

同時に、なぜそのようなルールがあるのか、「特定外来生物」といった生き物がどうして存在なのかについて子どもたちと考えた。

「悪いことをしてしまうから」「強いから」「他の生き物を食べてしまうから」「殺すのは可哀想」など子どもたちなりに懸命に考えていた。

また、元々の経緯としてウシガエルの餌として放たれたり、縁日などでの販売されたのちに放されていたりと、人為的なことが原因であることについても伝えた。

ザリガニとのかかわり方や外来種についてしることと同時に「いのち」について考える時間となった。



【考察】

本節では、自分なりの「わがらう」とする姿からどのようなかかわり方や「からだ」の動きが見られるか、また、その子なりの探究の深め方や「あらわしかた」についての考察をする。

【事例 4-1】では、Ⅲ節【事例 3-2】の「大きく観てみたい」という声からマイクロスコープで「死んでしまったザリガニ」を観た様子を記述した。「動かないからこそ大きく観てみる」と言っていたが、この時の様子からすると単に「観察をしたい」というだけでなく、「なぜ死んでしまったのか」を深めているように感じた。つまり、「視覚」から得た“違和感”から死の理由を探っていたのではないと思う。

そして、それと同時にここでも「嗅覚」をつかって情報を得ていた。「あたりめとおなじにおいがする」という言葉があるように子どもは感じた「におい」を「比較」して「情報の整理」を行っていた。

【事例 4-2】では様々な「あらわしかた」を記述した。今回はザリガニであったが、子どもは「好きなものをあらわす」ことが保育のなかで多く見られる。そして、「あらわしかた」も人それぞれである。ここには、いわゆる一斉的に保育者が出した「お題」を作る製作活動とは異なり、自分の「からだ」で感じとっていることの表現でありそこには多くの思いが込められているように感じた。

生き物の構造への興味が高い Y くん、本物思考の A くん、想像力豊かでイメージで絵を描く H ちゃん…。どの表現も魅力的であり、「その子らしさ」が存分に「あらわされている」ように感じた。子どもの内から出る「あらわしたい」気持ちを大事にしていきたくと改めて考えさせられた出来事であった。

【事例 4-3】ではザリガニが抱える「問題」について子どもたちと共有をした。身近になってきたからこそ、自分事で考えており、それぞれが新たなザリガニの一面に出合っているように感じた。

こうして、好きだからこそもっと「わかりたい」と深めていく時、そのものだけ（ザリガニ）とのかかわりにとどまらず、多様な道具や素材といったモノへのかかわりを通してさらに探究を深めていた。

2. 5. H くんのエサ研究

ザリガニ釣りで「どう釣るか」懸命に試すも「うまくいかない」ことが多かった H くん。それでも何度も挑戦し続け、その「うまくいかない」ことから多くの学びを得ていく姿や、その姿に他児や周囲のおとなの「ここ」と「からだ」が動かされていく様子があったため、本節では H くんの様子に焦点をあてて取り上げる。

【事例 5-1】「しらすを食べるかも」（5 歳児 2025 年 5 月 1 日）

H くんが「これ、エサになるかなと思って」といって「しらす」を片手に登園してきた。支度を済ませると、早速しらすを紐で括り水面に垂らしてみる。すると、しらすが浮かんでしまった。

H くんが「これじゃあザリガニが掴めないよ」と言い、困った様子。すると、隣でザリガニ釣りをしていた E ちゃんが「あのさ、釣りしたときに重いをつけたよ」と自分の経験をもとにアドバイスをした。そして「んー重い…」と H くんが悩んでいると、E ちゃんはすかさず「石とかがいいと思うよ」と伝えた。

その言葉をもとに近くの石を手に取りながらおもりを探した。はじめに選んだのは小さな石であった。それを糸で結ぶことは難しく再び選び直す。そして再度、石を探し今度はもう少し大ぶりなものを持ってきてしらすとおもりをつけて水面に下ろすと、中にエサが沈んでいった。しかし、全く反応はなく釣ることはできず H くんは「今度はしゃけを持ってこよう」といって、その日は釣りをやめた。



【事例 5-2】「するめとカプセル」（5 歳児 2025 年 5 月 7 日）

後日、H くんが持ってきたものは「するめ」と「カプセル」であった。そして、カプセルの中にするめを入れ「この穴からさ（カプセルの）、においをだそうと思って」といって紐から吊るしてそれを水面に放った。

カプセルがプカッと浮かんだ。「あれ？沈まない」といいながら少しカプセルを揺らす H くん。すると、カプセルの小さな穴から少しずつ水が入っていき徐々に沈んでいった。

しばらくして、「んー、釣れないな」といって引き上げた。「このまま（カプセル）だと、ザリガニがきても釣れないね」と話した。



【事例 5-3】「進化する釣竿」（5 歳児 2025 年 5 月 7 日～5 月 8 日）

においを手掛かりに釣ろうとする H くんにはサベキ釣りの仕掛けについて図を用いて話をした。すると、「そうそう！こういうの！」と目を輝かせ、その仕掛けをつくることにした。近くにいた T くんや M ちゃんも「釣竿つくるの？」「手伝うよ」といって一緒に考えはじめた。

まずは図をもとに、材料を決めるところからはじめた。竿は竹、糸はたこ糸、カゴはカプセル…とここまでは難なく決めていた子どもたち。



ところが、魚釣りの仕掛け図のため、針がついている。「ここはどうしようか」と頭を悩ませているうちに降園時間となってしまった。



次の日、「餌をつける場所につけようかと思って」とHくんがクリップをもってきた。「寝る時に色々考えた」と夜な夜な考えていたようだ。

つまり、カプセルにエサを入れて下にはクリップをつけて餌を挟むという作戦のようだ。TくんとMちゃんも協力しながら、図を見て忠実に仕掛けをつくりあげていく。

【事例 5-4】「浮かぶとか沈むとか」(5歳児 2025年5月8日)

「あ、おもりわすれてた」「おもりとってくる」と話して園庭へ向かった。近くでそれを聞いていたKくんが「俺もいく」と言って二人でおもりを探しに向かった。Eちゃんとしらすを餌に釣りをした際に、石をおもりにしていたHくんだったが、新たなるおもりを求めKくと調べ始める。

「浮かぶ沈む実験をしよう」といって園庭の色々なものを探し始めた。透明のケースに水を張って用意すると、そこに集めたものを入れて観察をはじめた。



実際に石や葉っぱ、桜の実、竹、輪ゴム、木片、枝、ティッシュなどで実験をした。それらを水に入れた様子を見て「浮いた!」「沈んだ!」と「浮く・沈む」を調べることに夢中になる2人が土の塊を入れてみると水が一気に茶色くなった。すると、浮いたでも沈んだでもなく2人は顔を見合わせて「溶けた!」と言った。

そうして、色々試した後「やっぱり石だ」といっておもりは石にすることにした。

【事例 5-5】「カテゴライズ」(5歳児 2025年5月8日、6月16日)

おもりもつけてついに完成したHくんの釣竿。

この日は、エサに使おうと持ってきていたのは「キャベツ」であった。カプセルにキャベツとするめを入れ、クリップにキャベツを挟んだ。

「今日は釣れると思う」と言い、じっと待つHくん。

しばらくして「これも違うか」話し、水面から竿を上げた。

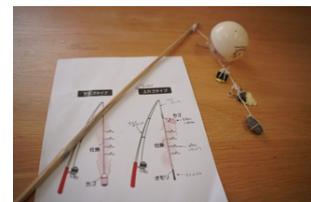
でも、「これで釣りするの楽しかった」と思いを込めてつくった自分の釣竿で釣ることに喜びを感じていた。

また、どうしてキャベツを持ってきたのか尋ねてみると、

「あのさ、しらすはしょっぱいでしょ。しょっぱいはだめだったからつぎにイカにした。」

「イカはさ、においがするからね。でも釣れなかったでしょ。」

「そうしたら次はパリパリがいいと思ってキャベツを持ってきた」と話した。



後日、園外でも自分のつくった釣竿で誇らしげに釣りをするHくんの姿があった。



【事例 5-6】「最強を使って」(5歳児 2025年5月13日)

しばらくして、Hくんはエサではなく「ザリガニ実験用 使い終わったら幼稚園のものにしても大丈夫です」と保護者の方のメモがついている「金魚すくい用のポイ(ネットになっており破れないもの)」を持って登園してきた。

そして、「先生、最強を持ってきたよ」とニヤリと笑った。「これで“釣る”」と意気込み、早速ポイでザリガニ釣りをはじめた。気温が上昇していたこともあり、ザリガニのいるちいさな田んぼは水面が濁っていた。ここにいるだろうと思う箇所をポイで探りながら、時々跳ねるザリガニに期待を寄せるも釣り上げることはできなかった。そして、「最強じゃなかったかも」悲しそうな声でそう言った。



しかし、ここで諦めないのがHくん。今度はポイを置いて石を集め、ポイと一緒に持ってきていたお皿型の容器に石と餌を入れはじめた。

容器を沈めて捕まえる作戦のようだ。次々に石を追加するHくんだが、入れている石が小さいこともあってなかなか容器が沈まない。痺れを切らして容器を押さえ込んだ。すると、容器が水で溢れ、沈んでいった。



しばらく待ってから容器を取り出してみるも、そこにザリガニの姿はなかった。

【事例 5-7】「ザリガニトラップ」(5歳児 2025年5月13日)

Hくんが容器を沈めてザリガニを捕まえようとしているのを見て、Tくんが「あのさ、ペットボトルで魚を捕まえるやつあるよね」と小魚トラップを提案した。「なにそれ？」と不思議がる子もいたがTくんなりに一生懸命に伝えていた。

小魚トラップの作り方を調べ、それを参考に「ザリガニトラップ」をつくった。あたりめをトラップの中に入れ、沈めてみる。セットしてから降園前まで何度も確認する子どもたち。

次の日も登園してくると、一番に確認しにいった。しかし、残念ながらトラップの中にザリガニの姿なかった。



後日、あたりめで釣りに挑戦していたHくんにはじめてのアタリがあった。「やっぱりこれか」とニヤリとしたHくんであった。



【考察】

本節では、Hくんの姿から、「からだ」を動かし探究を深めていくなかで出合う「うまくいかないこと」から、何を心得、繰り返し「試す」ことや「自分なりにわかっていく」ことの意味について考察する。また、そうした姿が他児や周囲のおとなの「ところ」と「からだ」を動かしていたことについて論じる。

【事例 5-1】でしらすを持って登園してきたHくんだが、それまであまりザリガニ釣りの近くにいなかった印象であったため、少し驚いた。しかし、その後振り返ってみるとはじめの園外保育でのザリガニ釣りの日に池のそばで竿を投げている姿が写真から確認でき、常にはいなかったが興味があったことがわかった。

そして、Hくんの関心が高かったことは「エサ」である。「ザリガニはどのエサで釣れるのだろうか」これが彼の大きなテーマであった。

Hくんが闇雲にエサを持ってきているわけではないことが伺えたのが【事例 5-5】での「あのさ、しらすはしょっぱいでしょ。しょっぱいはだめだったからつぎにイカにした。イカはさ、においがするからね。でも釣れなかったでしょ。そうしたら次はパリパリがいいと思ってキャベツを持ってきた」という言葉である。

つまり、ここでは「自らの味覚や嗅覚を生かし、ザリガニの側にたって“食べたい”と思うものを考えていた」のである。一見的外れなエサに思うかもしれないが、まさに自らの「感覚」を通して「自分なりの答えを見つけようとする姿」であると感じた。

そして、「エサ」だけでなく「釣り方」にもそれはあらわれていた。サビキ釣りのような技法で釣ろうとする姿にも「いいにおいがしたら食べたくなるかな？」とザリガニの気持ちになっていたのではないかと思う。つまり、ただ単に釣り上げる方法の模索ではなくあくまでHくんは生き物の側から考えていたように思う。

釣りという行為は人間至上主義であり、決して生き物にとって「良いこと」ではないと思うが、このHくんの一連の探究はザリガニを「愛でている行為」であると私は感じた。

また、【事例 5-1】【事例 5-4】【事例 5-6】では「浮く・沈む」について「からだ」をつかって「わかっていく」とする姿が見られた。「試して」みるなかで比較し、自らの「知」へと変えていった。そういったなかで浮くでも沈むでもなく「溶ける」という現象に出会い、「おまけ」も得ることができた。第2章の1節の考察でも触れたが、「土は溶けたね」と何度も嬉しそうに話していたHくんの姿から、思わぬ出来事からの学びは大きいのだと感じた。

振り返ると「うまくいかないこと」の方が多かったHくんであったが、だからこそ繰り返し「試す」なかに多くの学びがあったように感じる。

また、他児が協力したり、一緒にやってみる姿や保護者の方がHくんの試したいエサや実験用にと「ポイ」

を持たせてくれたこと、担任保育者が毎日嬉しそうに「今日はこのエサでやっています」と一緒にザリガニ釣りをしたり嬉しそうに話す姿が生まれ、「Hくんの探究する姿」そのものが周囲の人の「ところ」と「からだ」を動かしていたと考える。

2. 6. 「これでいい」と思うこと

前節では一人の子どもの探究に着目した事例を中心に取上げたが、ここでは、“あたりめをつくる”ということに「ところ」が動き、クラスで多様な感じ方や考え方を持ち寄りながら、自分たちの「からだ」で体現し、探究を深めていた姿を取り上げる。

【事例 6-1】「あたりめをつくる」(5歳児 2025年5月15日～20日)

【事例 3-4】で「あたりめのおはなし」を書いていたHちゃんは引き続きあたりめについて調べていた。そんな中で「あたりめをつくってみたい」と話し、クラスの集まりで共有した。

あたりめをつくるにあたってイカが必要ということ、乾燥させることは「あたりめのおはなし」で明らかになっていたので、実際にどう進めていくかを話し合った。

まずはじめに、イカはどこで買えるのかを持ち寄った。

「Aスーパーに売ってたと思う」「Bスーパーにはなかったよ」「魚屋さんにあるよ」「お父さんに聞いてみる」とお家の人からの話も聞いて、意見を集めた。売っているという情報をもとに買いに行ける場所を探した。

何軒か事前に保育者が連絡して検討し、園から徒歩で行ける近所のスーパーへ買いに行くことにした。

こうしてイカの購入についてはある程度すぐに決まったが、一方の乾燥させる方法で頭を悩ませていた。「外に置いておけばいい」「でもさ、夏はだめだよ。くさるから」「虫もくるしね」「じゃあ冬にやる?」「だめ、冬はザリガニがないもん。つくったあたりめで釣りにできないよ」「あの、畑にあるやつ?つくればいじゃん(カカシのこと)」「だから外はだめ」「じゃあ部屋?」「扇風機で乾かせばいいじゃん」

といったように「夏は腐ってしまうのではないか」「虫が来てしまうのではないか」という問題に直面し、「冬にやる」という案も出たが「冬はザリガニがないから」と“やってみたいけどできなそう”というジレンマが生まれてしまった。

しかし、「どうしたら夏でもイカを乾燥させられるのか」を様々な意見を出し合って検討した。この話し合いの末、①虫が来ない仕掛けをつくって外でやる ②保育室内の乾燥機で乾かす という2つの作戦が決定した。



【事例 6-2】「イカを買う」(5歳児 2025年5月26日)

先述したように、園からも徒歩で行けるスーパーにイカを買いに行きたい子たちがいくことになった。地元のスーパーということもあり、店内に入ると引き寄せられるように子どもたちの足は「SEA FOOD」と書かれたコーナーに向かっていた。

“どのイカにしようか”

子どもたちの目当てのイカは一杯のイカ。しかし、刺身用のイカしか見つからない。

「こういうのいいんだけど…」と出来上がっているするめを指差しながら探し回る。

Kくんが近くの店員さんに聞いてみようとして提案した。

「すみません、イカありますか?」

「もしかしら届いていたかもしれないな!ちょっと待っててね」

期待を胸に店員さんの戻りを待つも「ごめんね今日は品切れみたい」とないことが発覚。



「わかりました」といったものの残念がる子どもたち。

「どうする?今日は買うのやめる?」

「とりあえずさっきのを買おう」

「分厚いやつと細いのを買う」

日を改める案も出たが、初めにみつけた“そでいか”と“解凍するめいか(いかそうめん)”を買うことにした。想定していたものとは少し違ったけど、無事にイカを購入して園に戻った。

帰りの集まりで購入する経緯を友だちに伝えながら、買って来たイカをみんなで回した。



すると、自分の手に回ってくると何故だか多くの子が自然と鼻に近づけていた。「あんまりにおいがないね」「魚みたいなにおいがちょっとする」など口々にした。



買おうとしていたイカとは違ったが「これでいい」と納得の表情をみせた子どもたちであった。そして、ここでも気になるのは「におい」のようであった。

【事例 6-3】「イカガオドル」(5 歳児 2025 年 5 月 26 日～6 月 4 日)

購入したイカを早速乾燥させることにした。

- ① 虫が来ないように仕掛けをつくって外で乾燥させる
 - ② 保育室内の扇風機の風を使って乾燥させる
- という 2 つの作戦を実行するようになった。



そのため買ってきたイカを半分ずつになるようにザルとネット丁寧に並べ始めた。

イカと一緒に入っていたツマ・紫蘇・わかめも乾燥させてみたいという声があり、一緒に並べみた。

①の作戦について

- ・虫が来ないようにする仕掛け

外で乾燥をはじめるときに、ザルと一緒に用意されたのが LaQ でできたオニヤンマとロボットであった。

オニヤンマをつくった A くんは保護者に、このエピソードを伝えたところ、実は少し前にホームセンターでオニヤンマの虫除けを見かけたそうだ。

その際に「これは何？」とお父さんに尋ね「虫除け」ということを知ったそうだ。その時の出来事がこのアイデアに繋がっていたことわかった。



- ・新聞紙のカラス

話し合いでは虫対策の話しか出ていなかったのだが、大慌てでつくっていたのがこの新聞紙のカラスであった。

吊るして「これで鳥もだいじょうぶ」と一言放った。



②の作戦について

- ・扇風機の位置が重要だ

夏は腐ってしまうからと考えていた室内の作戦。

ネットに風があたるか声を出し合って調整をする。



乾燥翌日… (5 月 27 日)



「細くなってる！」

「硬くなった！」

「大根もすごい！」

「切り干し大根になった！」

どちらの作戦も順調に乾燥しはじめていた。

イカそうめんは細いからかもうかなり乾燥が進んでいたが、そでいかは少し分厚いこともあってか YD くんはほっぺでツツンして「まだ“硬すぎない”」と話した。まだ少し柔らかいと感じていることが伺えた。

その後もにおい・色・感触・形の変化等を記録しながら乾燥の経過観察をした。しかし、なかなか子どもたちの「知っているあたりめ」には近づかず、納得がいかない様子。



特に、「硬さ」と「におい」が違うと話した。「もう少し時間が必要かも」と日を置いて様子を見続けた。1 週間経ち、どうすれば「硬さ」と「におい」に近づけられるか話してみると R くんが「焼いてみたらいいんじゃないかな」とアイデアを出した。「いいかも」と賛同の声も多く、外で乾燥させたものと室内で乾燥させ

たものを半分ずつを焼いてみることにした。「何で焼く?」「フライパン?」「オーブンの方がいいんじゃない?」「オーブンの方がよく焼けそう」となり、オーブンで焼くことにした。(6月4日)



「何分焼こうか?」「15分」「えー長すぎ」「焦げちゃうよ」「じゃあ5分」5分でセットしてはじめてみた。1分ほど経過した時、「においがする!」「なんか動いてる!?!」「解凍するめいか“がゆらりとオーブンの中で踊っており、熱が加わり変化していく様子をおもしろがっていた。

焼き時間は1分26秒でつま、紫蘇が丸焦げになりストップ。イカはちょうどいい感じで焼き上がった。焼いたイカは格段に匂いが変わった。そのにおいはなんだか懐かしい感じであった。



「イカのおいが強くなった」
「おいしそうなおいになった」
「魚っぽくなった?」
色々な意見がでたが、“何かが違う”。

このにおいはなんだろうと思いを馳せていると近くにいたYくんもそんな表情をしていた。そんな時Aくんがヒトコト「あ!これさ、かっぱえびせんのおいみただね!」と言った。Yくんと顔を見合わせ“それだ!”となり、Yくんは「かっぱえびせん食べなくなっちゃった」とニコニコしていた。

それでも焼いてみたものと市販のあたりめと比べてみると硬さにもおもしろいも少し異なるが「これとはなんか違うんだけど…これでいい」といった。ようやく「できた」と思えるあたりめが完成した。



LaQ でつくったザリガニでのシュミレーションもバッチリの様子であった。

【事例 6-4】「たしかな手応え」(5歳児 2025年6月4日)

完成した4つのあたりめでザリガニ釣りにチャレンジ

- ① 外で乾燥させたもの
- ② 室内で乾燥させたもの
- ③ 外で乾燥させたのち焼いたもの
- ④ 室内で乾燥させたのち焼いたもの



自分たちでつくった4種類のあたりめから釣れそうと思ったものを選び、持ち場につく。

“早くこのあたりめで釣りたい!”という強い思いから「ぼくがこの場所がいい」「狭い」「ちょっと竿どかして」などと喧嘩も起こっていたのだが、そんななかWくんはたこ糸に直接あたりめをくくりつけ、静かにじっと待っていた。すると、糸先がピクンとして、ゆっくり持ち上げると水面から大きなザリガニが顔を出した。釣り上げることはできなかったが、しっかりと自分たちでつくったあたりめをハサミで挟んでいたのだ。そして、満面の笑みで「釣れた!」と言った。

喧嘩をしていた子たちも「すごい!」と称賛し、Wくんの使っていた「外で乾燥させたのち焼いたもの」に付け替えたり、同じように静かにじっと待ったりしはじめ、気づけば喧嘩も自然とおさまっていった。

その後も釣り上げることはできなかったが、糸先・竿先に確かな“アタリ”があり何度もザリガニが水面から顔をだし、「釣れた!」と嬉しそうに話していた子どもたちであった。



[考察]

あたりめづくりに奮闘する子どもたちは“思うようにならなかった”ことに対して「これでいい」と納得していく姿が多く見られた。本節では、そのような「納得感」が持つ意味やその背景について、ならびにどのように「からだ」の感覚を使って情報を獲得・交換しながら協同的に探究していたか、そしてその営みを支えた保育者の援助や「からだ」を通して学ぶことの意味について考察する。

ザリガニ釣りに夢中になるなかで知った「あたりめ」という存在。“これは一体なんだ?”というところから

はじまったが、いつしか「自分たちでつくったあたりめでザリガニを釣りたい」そんな思いが溢れていた。

その思いを実現するために必要なことを出し合って取り組むも、イカを魚屋さんで買うという案が出て連絡するも断られてしまったり、一杯のイカを買うことができなかつたり、乾燥させるには適していない季節であったり、なかなか既製品のあたりめに近づかなかつたり…と“思い通りにならないこと”も多かつた。

しかし、そんななかでもそれぞれが「できること」を懸命に考え、実行していく中で「なんか違うけど、これでいい」ということが生まれ、その時の子どもたちの表情は“落胆ではなく納得の表情”であった。

「これでいい」と思うことは「しっくりきた（納得した）」ことであると考え。この「しっくりくる」感覚こそ「からだ」を通して学ぶ醍醐味ではないかと感じた。実際には釣り上げられなかつたが、子どもたちは自信を持って「釣れた！」と言った。試行錯誤を重ねたからこそ出た「こころの声」であったように感じる。

また、このあたりめづくりでも、イカの買い出しでの誰に言われるわけでもなく「SEA FOOD」のコーナーに足が向かっていく、ホームセンターで知った「オニヤンマ」の存在、手の感覚だけでなくほっぺで「硬さ」を感じて考えるなど、自らの「感覚」や「経験」を十分に活用していた。

その中でも特に「嗅覚」による情報は大きいように子どもたちの姿から感じた。子どもたちの身の回りでも情報収集ができる絵本や図鑑、インターネットという媒体があるが、そこにはない「におい」から多くの情報を得ていた。言葉優位ではなく自らの「嗅覚」から「感じること・変化・違和感」ということが私たちにとって大きな情報源であることを子どもたちの姿に学んだ。そして、保育者が「可視化」することを意識して行なっていた「記録する」という行為もまた子どもたちの探究を支えていた。触れる、みる、におう…と自らの感覚を手がかりに情報を得る時に「変化」や「違和感」という感覚は大きな意味を持っていると考える。それらを写真や文字で記録をしていくと、情報が重なり、その時には気づかなかつた「変化」や「違和感」、「比較」が生まれ、学びが深まっていた。

第3章 総合考察・今後の課題と方向性

3. 1. 総合考察

(1) 響き合う「こころ」と「からだ」の動き

何に、いつ「こころ」が動くのかは人それぞれであり、目にはみえないものである。しかし、感動・驚き・疑問に出合ったとき、子どもは「試してみたい」と自らの「からだ」の多様な感覚を使って「わかろう」としていく姿が多く見られた。つまり、「からだ」を動かし、探究している姿がみえるときには、「こころ」の動きもみえてくるのだと考える。

本事例でいえば生き物とのかかわりを楽しむ姿、ザリガニ釣ることをおもしろがる姿、釣り方やエサにこだわる姿、エサづくりに熱中する姿など、それぞれの子どもがそれぞれの「科学する心」を発揮していた。その個々の探究が軸となり、他児の新たな探究を生み出し、お互いの探究を支え合いながら相互に影響を与えている様子があつた。つまり、「こころ」と「からだ」が動いている姿そのものにも、誰かの「こころ」と「からだ」を動かす力があり、響きあい広がっていくのである。それは「おもしろそう」と魅了され、誘われていく様であり、誰に言われるわけでもなく、動いてしまうものであつた。一人ひとりが「おもしろがり」、自らの探究を深めていくことは、一見個々の探究であるが、新たな探究の広がりを生み出すものでもあることも明らかになった。

また、本研究を通して子ども理解における「からだ」の捉え方についても考え直すことができた。緊張してグッと力む、動揺して目が泳ぐ、下唇が突き出る、だらんと体を預ける、背中が丸まるなどそうした「仕草」の一つひとつにも大きな意味があるだろう。つつい、子どもの「言葉」を手掛かりにしまつたり、その子の気質や性格、「こころ」を詮索してしまつたりすることが多いが、本音はきっと「からだ」にあらわれるのだろう。とはいえ、そう簡単に「こころ」はわかるものではない。それでも、子どもの「からだ」が放つサインは、「こころ」をあらわすもののひとつとして捉え、子ども理解の一つの手がかりとして重要な意味を持つ。

(2) 子どもを取り巻くおとなの「こころ」と「からだ」

冒頭に記述したが当園ではこれまで、保育者が先回りし「うまくいかない」機会を奪ってしまうことが多々あつた。そこには「成功体験」をしてほしいという願いがあつたことではあつたが、それはむしろ子どもたちの探究や挑戦の機会も奪ってしまつていたと考える。

5歳児担任保育者の一人は、これまで「正解」に導いてしまつたことが多かつたが、今年度は“うまくいかない”を意識して保育してみた時に「うまくいかなかつたからこそ気づけたことやもっと知りたくなつたこと、やっとなつた達成感や喜びをより感じることもできた」と言う。一方で、「うまくいかないが続いてしまつると興味

が途切れてしまうかも」と不安もあったようだが、子どもの「声」を手掛かりに環境を再構成したり、保育室に子どもたちの探究を「可視化」したりすることで興味が継続していったと話した。

“正解に導いていく”際には、おとなの「声」が中心に置かれ、「話すこと」が主であったが、本実践では子どもの「声」が中心にあり、「聴くこと」が大事にされていたということである。おとなは話さないほうがいいということではないが、言葉優位で物事を伝えてしまうと実感を持たずに「わかったことにしてしまう」可能性がある。それよりも子どもたちが自らの「からだ」を通して「わかっていこうとする」過程を大事にし、その中で生まれる「声」や「つぶやき」に耳を澄ませて、どう呼応しているかが重要であった。

また別の保育者の話からは、保育者の「意識」の変化が窺えた。例えば、自分の携帯の検索履歴がクラスのブームに関連したことが多くなっていたり、自分の買い物中にも「これも使えそうかも」と子どもの探究と結びつけていたりということがあったようだ。このような出来事を「結びつけちゃっていた」と表現した保育者の言葉の背景には、いずれも子どもの探究を「意識」して調べ、考えることだけでなく、すでに子どもの姿に「こころ」と「からだ」が動かされ、「無意識」のうちにも探究を味わっていたといえるだろう。そして、そういった時には子どもの「声」は「聴こうとして聴く」ものではなく「聴こえてくる」ものになっていた。

このように、本実践では“うまくいかないこともおもしろがる”や“子どもの「声」が「聴こえてくる」”といった保育者自身の子どもの姿に向かう「構え」、すなわち、保育者の「からだ」にも変化が見られたように感じる。こうしたことから、想定外の出来事やうまくいかない出来事の中に多くの学びがあるとすれば、保育者の「からだ」の構えの在り方が、子どもの事象に向かう「こころ」と「からだ」の動きに影響を及ぼすことから、子どもだけでなく、自分たち保育者が何に「こころ」を動かされ、どう「からだ」の反応しているのかについても、子どもが「科学する心」を発揮していく上では、捉え直していく必要があることが明らかになった。むしろ子どもは「うまくいっていない」と思っていないかもしれない。おとなが良し悪し決めつけるのではなくその子なりに「やってみようとする姿」を支え、例え思わぬ結果になろうとも頼れる「安全基地」としての存在になる必要があり、まさしくそれが「安心と挑戦の循環」（子ども家庭庁：はじめの100か月の育ちビジョン）に繋がっていくと考える。

そして、その安全基地となるおとなの姿は「自分が面白がっていることを面白がっているくれる存在」ともいえるのではないか。そのような存在が「安心感」につながり、子どもの「科学する心」を「発揮する」あるいは「育まれる」上で基盤となる重要な要素であると考えた。

（3）「知ること」と「わかること」

今回の実践では、子どもたちが知識としてザリガニの釣り方を知るという「知識先行」ではなく、まさに自らの「からだ」を通して「わかっていく（感覚を得て、自らの学びにつなげる）」姿が多く見られた。

釣りという営みそのものの特徴として「知識だけではどうにもならない」要素を持っていることも要因であると思うが、こうした答えがない問いに対して、「からだ」を通して試す・比べる・変える・感動する姿は、まさしく科学的な営みであり「科学する心」を「発揮」している姿であったと思う。

本実践では特に「嗅覚（におう）」姿が多く見られた。今回、研究の手掛かりとして「からだ」に着目したからこそ気づきであった。2章6節での考察でも触れたが、「嗅覚」という感覚は情報獲得において大きな意味を持つことが明らかになった。「知ること」が容易になった世の中だからこそ、特に乳幼児期においては「知ること」よりも、自らの「感覚」を使って世界を感じ、その奥深さに触れるなかで、「こころ」と「からだ」動く出来事を自分なりに「試し」、「わかること（腑に落ちること）」を大事にしていきたいと改めて感じた。

3. 2. 今後の課題と方向性

○「いのち」の捉え方

子どもたちがザリガニ釣りでエサとして捉えたミミズやちいさな生き物のいのちについて、もう少し丁寧に関わりを持てるような声かけが必要であったと感じる。子どもたちが感動と驚きに包まれていたことや食物連鎖の学びがあったことは確かであったが、子どもたちは「エサ」として試していた。

ミミズで釣ることが盛り上がった頃、「ミミズも生きているよね」と話題に出した時、「ミミズも生きているからあたりめで釣る」という子どもにはいたが、「でもミミズの方が釣れるから」という声もあった。子どもたちの「釣りたい気持ち」と「いのちについて考える」どちらの思いもあり、難しさを感じたが、こうしてじっくりとかわるからこそ、いのちの大切さや共生についてももっと丁寧に取り組むべきだったと反省している。今後、子どもたちが生き物とどうかわり、大切に作る心が育まれていくのか検討を重ねていきたい。

【研究代表者・執筆者名 澤井陽平】

【研究同人 小永井瞳・洞口愛未】